

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24501293

研究課題名(和文)大都市圏近郊におけるルーラリティのリハビリテーションに関する地理学的研究

研究課題名(英文)Geographical Studies on the Rehabilitation of Rirality in Urban Fringes

研究代表者

菊地 俊夫(Kikuchi, Toshio)

首都大学東京・都市環境科学研究科・教授

研究者番号：50169827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：都市化や混住化、あるいは過疎化や高齢化などにより、農村景観や農村コミュニティが脆弱化し、ルーラリティが不健全なものになっている。このようなルーラリティのリハビリテーションモデルを構築した。具体的には、地域内の農家や居住者、およびさまざまな環境資源の結びつきを強める「下部構造」としての「ボンディング」と、地域内の農家や居住者が地域外の組織や環境資源と結びつく「上部構造」としての「バンディング」がつなぎ手を介して(「介入介入構造」によって)組み合わせることにより、農村らしさ(ルーラリティ)と都市らしさ(アーバニティ)が共存しルーラリティのリハビリテーションが達成される。

研究成果の概要(英文)：Rapid urbanization, depopulation and aging of society are causing a high impact on/damaging rurality by weakening rural landscapes, rural communities and rural activities in urban fringe, hinterlands and metropolitan marginal areas of developed countries. A model has been created to rehabilitate such unhealthy/damaged rurality. In concrete, combing the "bonding" as the "substructure" within a rural community and space with its "banding" as the "superstructure" with outside communities and spaces enables co-existence between rurality and urbanity which in result become the mechanism for rehabilitation of unhealthy/damaged rurality.

研究分野：地理学

キーワード：大都市近郊農村 ルーラリティ リハビリテーション 環境資源 上部構造 下部構造 ボンディング
バンディング

1. 研究開始当初の背景

大都市圏の農村に関する研究は、従来、農業の経済的な利潤最大化を優先する生産主義のフレームワークで議論されてきたが、1990年代以降、環境や生き甲斐などの非経済的な要素を踏まえて農村の性格を議論するポスト生産主義のフレームワークが台頭するようになってきた。ポスト生産主義の農村・農業地理学の研究においては、ルーラリティ（農村性や農村らしさ）に関する研究が中心となり、農村は食料生産の空間だけでなく、多様な機能をもつ空間として、あるいは非経済な機能（癒しや生きがい、環境保全など）をもつ空間として捉えられてきた。

2000年代以降、ルーラリティに関する研究は条件不利地域の農村における不耕作地や荒廃林地の美化や有効利用を通じて、あるいは大都市近郊農村における緑地環境の保全と適正利用を通じて行われるようになり、緑地や農地を含む農村の生態環境が経済環境と社会環境に相互関連していることを明らかにしてきた。このように、農村の生態環境を中心に経済環境と社会環境を関連づけることにより、ルーラリティの再編や創生が重要になってきているが、もともとの環境資源をどのように回復させ、健全な姿にしていくかも議論されるようになった。ルーラリティ本来の健全性を回復させるための方法、つまりルーラリティのリハビリテーションがさまざまに模索されるようになった。しかし、ルーラリティのリハビリテーションが農村の生態環境と経済環境、および社会環境をどのように関連づけて議論し、それがどのような地域システムを構築することで可能になるのかは現在まで残された課題であり、それが本研究の契機にもなった。

2. 研究目的

本研究はルーラリティの再編や創生に関する研究をさらに発展させて、ルーラリティのリハビリテーションに関する地理学的な考察・議論を行う。ルーラリティは従来の研究で定義されているように、農村性や農村らしさを意味しており、農村の自然的・生態的基盤と社会的基盤、および経済的基盤が有機的に相互関連することで構築されていた。そのため、ルーラリティの1つの基盤が弱体化すると、他の基盤にも影響

を及ぼし、ルーラリティ全体を弱体化させ、基盤間の相互関係のバランスを欠いた不健全な状態のルーラリティになる。このように弱体化し、基盤間相互のバランスを欠いた不健全なルーラリティを、基盤間相互のバランスを保った健全な状態に回復させ根づかせることが、ルーラリティのリハビリテーションである。このようなリハビリテーションは景観や土地利用に反映されることになる。ルーラリティのリハビリテーションを必要としている地域は、ルーラリティが急速に脆弱化している大都市圏の近郊や遠郊であるため、本研究は大都市圏の近郊や遠郊の農村を対象にルーラリティのリハビリテーションの議論を進める。

大都市圏の近郊農村と遠郊農村におけるルーラリティのリハビリテーション研究で明らかにすることは以下の2つである。第一は、近郊農村や遠郊農村のルーラリティのリハビリテーションがどのような地域システムで行われているのかを明らかにするとともに、ルーラリティのリハビリテーションが行われるためにはどのような地域システムが構築されるべきかを明らかにすることである。ルーラリティのリハビリテーションの諸相は地域の上部構造としての景観や土地利用に反映され、それを支える地域システムは地域の下部構造（自然的基盤・社会的基盤・経済的基盤の相互関係）として議論できる。しかし、地域の下部構造の再編や内的発展でルーラリティのリハビリテーションがうまくいかないことも多い。そのため、ルーラリティの上部構造と下部構造をつなぐ、介入介入構造（政治・政策・計画などの外的インパクトや外的組織・外的装置）が必要であり、そのような介入介入構造を含めたリハビリテーションの地域システムを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、大都市圏の近郊農村と遠郊農村を対象にルーラリティのリハビリテーションの研究を、上部構造（景観と土地利用）、および下部構造（自然的基盤・社会的基盤・経済的基盤）および介入介入構造を調査・研究し、それぞれの構造における地域的なサブシステムを明らかにする。さらに、それらを考慮しながら、上部構造・下部構造・介入介入構造の相互関係から

地域システムを構築する。次に、このような地域システムを一般化するため、大都市圏における近郊農村と遠郊農村のルーラリティのリハビリテーションをいくつかに類型化する。これらの地域類型に基づく事例において、ルーラリティのリハビリテーションに関する地域システムを明らかにし、事例地域の上部構造・下部構造・介入介入構造とそれらの相互関係を比較し、ルーラリティのリハビリテーションに関する地域システムの一般化を行う。

4. 研究成果

(1) 全体的な概要

大都市圏の近郊農村や遠郊農村では、都市化や混住化、あるいは人口流出や過疎化・高齢化により、農村景観や農村コミュニティが脆弱化し、農業景観や農村景観の維持管理が行き届かなくなり、ルーラリティが不健全なものとして存在するようになる。そのような不健全な状態のルーラリティを回復させ、健全な状態の農村環境を根づかせるリハビリテーションは、2つの地域システムを構築することで達成されることが研究成果としてわかった。つまり大都市圏の近郊型と遠郊型の地域システムである。

ルーラリティのリハビリテーションの地域システムは、地域の上部構造としての景観や環境と下部構造としての自然的基盤、社会的基盤、経済的基盤を結びつける装置としてコミュニティビジネスや異業種との結びつきなどの機能組織の存在によって構築されることを確認した。つまり、下部構造と上部構造のつなぎ手（介入介入構造）としての機能組織を含めた地域システムが構築されている。

このようなルーラリティのリハビリテーションに関する地域システムを検証するため内外の地域で実証的な研究を行った。東京大都市の近郊農村では、介入介入構造の主要な要素として農産物直売所を介した都市住民との交流が、イギリスのロンドン大都市圏では新住民（都市からの流入者）と旧住民（農家）と協働するコミュニティビジネスが、ルーラリティのリハビリテーションに大きな役割を担っていることが明らかになった。さらに、ルーラリティのリハビリテーションに関する地域システムが地域的差異をもっていることも検討した。それは、近郊

農村や遠郊農村における住民属性や混住の親和度、あるいは社会秩序の安定度などの社会環境に基づくものであった。例えば、新住民と旧住民のセグリゲーション（棲み分け）はリハビリテーションの地域システムにネガティブに働き、政策や計画などのトップダウンの介入介入が生じるようになることも明らかになった。

(2) 大都市の近郊農村におけるルーラリティのリハビリテーションの地域システム

東京都立川市砂川地区における近郊農村は、都市農業による農村空間の商品化によって維持・発展している。このような近郊農村と都市農業の維持・発展は農産物直売所の立地に大きく依存している。それは、農産物直売所が都市住民に農産物を直接販売する施設であり、その施設を都市住民のニーズに応える形で維持することで、農産物栽培が行われているためである。結果として、農産物直売場は介入介入構造として機能し、農村景観や農業的土地利用が維持されるだけでなく、農村コミュニティも維持されることになる（図1）。また、農産物直売所を都市住民が訪れて購買することにより、それを核とする農村空間は生産空間としてだけでなく、消費空間としても意味づけられてくる。

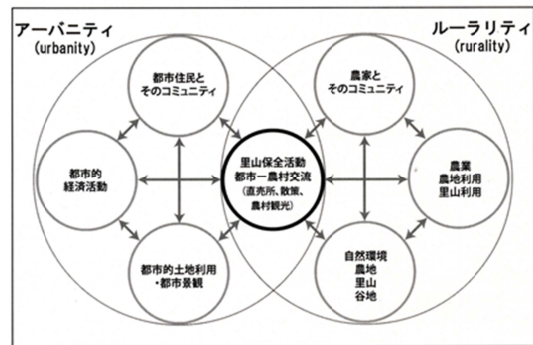


図1 大都市近郊農村におけるルーラリティのリハビリテーションに関する地域システム

立川市砂川地区において、介入介入構造の核となる農産物直売所は共同のもの和个人経営のものに大別でき、さらに个人経営の直売所は伝統型のもの、多品目農産物型のもの、農商工連携型のもの、および体験・コラボレーション型のものに類型化できる。基本的には、伝統型直売所が最初に立地し、それらは農家の高齢化な

どで減少する傾向にある。その一方で、伝統的直売所が多品目農産物型や農商工連携型、あるいは体験・コラボレーション型に移行するものも少なくない。伝統型直売所が他の形態に進化するためには農業後継者の存在が必要であった。また、農業後継者の考え方や意思決定によって、農産物直売所は多品目農産物型、農商工連携型、体験・コラボレーション型に分化している。

基本的には、個人経営の農産物直売所による売買は半径 500m 以内の都市住民（顔見知りの住民）を対象とするものであり、その狭い商圏（狭商圏）は限定された商圏のなかで、農産物直売所や都市農業は顔見知りの都市住民やその繋がり（ボンディング）だけに依存しており、ルーラルティのリハビリテーションの地域システムは不安定な存立基盤でしかなかった。都市農業地域が農村空間の商品化にともなって再編されるようになると、農産物直売所の狭商圏は個々の直売所の連携や異業種との連携（バンディング）を契機にして広域化の方向で改善されるようになった。つまり、立川市砂川地区の農村空間や都市農業は農産物直売所の進化（ボンディングの構造からバンディングの構造への移行）とともに、その商圏の広域化による持続性の確保によって支えられている。

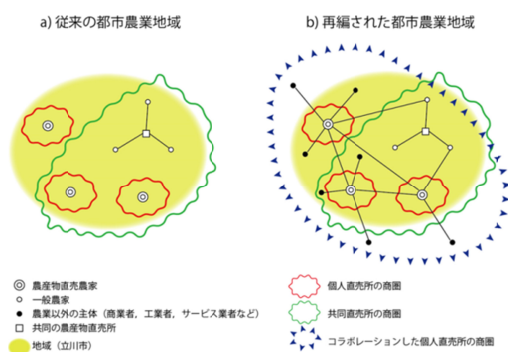


図 2 大都市の近郊農村におけるルーラルティのリハビリテーションの地域モデルの広域化（ボンディング構造からバンディング構造への変化）

(2) 大都市の遠郊農村におけるルーラルティのリハビリテーションの地域システム

ロンドンの遠郊に位置するウェールズ・ガワー半島のスランマドック村を事例にして、イギリス農村地域における人口流入の現状を俯瞰し、

新住民と旧住民との混住化にともなう農村社会とルーラルティの変容を明らかにするとともに、新住民と旧住民との衝突や対立（コンフリクト）を和らしたり解消したりする手段（リハビリテーション）としてのコミュニティビジネス（介入介入構造）の役割を検討した。

ガワー半島は高速道路の整備と相まって、ウェールズやイングランドの都市域との近接性が高まり、新住民の農村地域への流入が顕著にみられるようになった。このような新住民の流入ではガワー半島の良好な自然環境や景観が主要な吸引力となり、そのような地域資源の開発や有無が新住民の割合の地域的差異を生みだしている。つまり、ガワー半島の混住化は進展する南部とあまり進まない北部とに地域分化している。これは、干潟や湿地帯が広がる北部の地形条件と、良好な自然環境や景観が広がる南部との地域的差異を反映したものとなっている。

ガワー半島において、流入する新住民の多くは管理職や専門職など高度な都市的産業に従事する人びとであり、伝統的な農業や牧畜業に従事する旧住民と社会階層を異にしている。加えて、新住民の多くはウェールズ語を理解できない人びとであり、ウェールズ語教育を受け日常的にウェールズ語に触れる機会が多い旧住民と文化的属性も異にしている。これらのような社会階層や文化属性の差異は、旧住民と流入してきた新住民との間に対立・衝突や隔絶・分離などのコンフリクトの構造を生みだし、ついには地域コミュニティの二分化によってルーラルティや農村社会の破壊につながることも少なくない。また、新住民の増加にともない、別荘や週末滞在型のコテージが多くなり、過疎化や農村機能の低下（デブライベーション）がガワー半島の農村地域でも顕在化している。

農村地域の混住化にともなって、さまざまな問題が顕在化しているガワー半島において、スランマドック村の取り組みは画期的であり、他の農村社会のモデルにもなっている。スランマドック村では旧住民と新住民が協働してコミュニティビジネスを行うようになり、その取り組みの1つとしてコミュニティショップを営んでいる。コミュニティショップは農村の商業機能を補完するだけでなく、地域の農産物や加工品、あるいは工芸品を販売し、観光目的の来訪

者へのサービスを提供する場にもなっている。また、コミュニティショップに併設されたカフェは、旧住民と新住民が集い、情報交換や交流の場としても機能している。つまり、コミュニティショップなどのコミュニティビジネスは農村社会のデプライベーションを軽減させる働きを担っており、ルーラリティのリハビリテーションの介入介入構造になっている。また、このような介入介入構造は旧住民と新住民のコミュニティの社会階層やライフスタイル、および文化属性や居住景観を融合させる契機にもなっている。

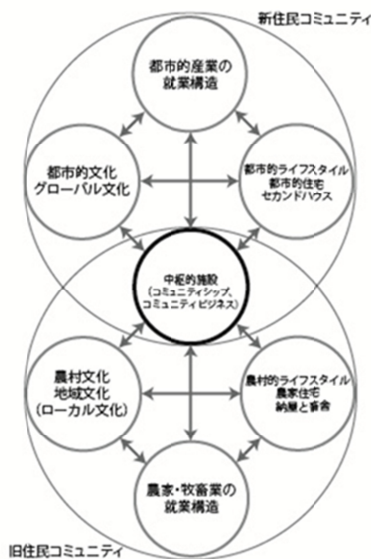


図3 大都市の遠郊農村におけるルーラリティのリハビリテーションの地域システム

遠郊農村でみられるコミュニティビジネスの発展にともなう農村社会の変容は、「住んでよし、来てよし」の地域づくりの一体的な風潮を生みだし、そのことが農村地域のルーラリティを基盤とした内発的な観光地化の素地にもなっている。そして、遠郊農村の介入介入構造に基づく旧住民と新住民が協働で行う地域イベントは（下部構造としてのボンディング）、本来、地域住民が楽しむものであったが、いつしか観光で来訪する者も楽しむものになった（上部構造としてのボンディング）。このような混住化農村の観光地化を内発的なものとして支えてきたのは、対立したり分裂したりする傾向にある2つの地域コミュニティを繋げる介入介入構造の中核機

関としてのコミュニティビジネスやコミュニティショップであった。先進国において、農村地域の混住化は遅かれ早かれ避けられない状況である。混住化した農村社会の諸問題（ルーラリティの崩壊など）を解決する手段として、本研究は旧住民と新住民のコミュニティの繋ぎ手としての介入介入構造とその中核的機関の存在を確認した。特に、ウェールズのガワー半島を事例とした研究では、コミュニティビジネスが異なるコミュニティの繋ぎ手となる介入介入構造の中核的機関として重要であることを明らかにした。

5. 主な発表論文など

[雑誌論文] 10件

菊地俊夫・飯塚 遼・山本 充、イギリス縁辺農村における地域コミュニティの変容にともなう観光地化・観光科学研究、査読有、9、2016年、25-32。

太田 慧・菊地俊夫、富士山周辺地域における農業的土地利用変化とその地域性。地学雑誌、査読有、124、2015年、1061-1084。

Kikuchi, T. and Ranaweera, E., Research perspective and methods on the changes of agricultural land use in metropolitan areas. Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University, 査読無, 49, 2015年, 78-87.

菊地俊夫・王鵬飛、北京大都市圏の農村変容からみた観光地化の潜在的可能性。観光科学研究、査読有、8、2015年、107-114。

菊地俊夫・飯塚 遼、東京における食料問題とその解法。地学雑誌、査読有、123、2014年、575-586。

Iizuka, R. and Kikuchi, T., Current situation and critical issues of primary food supply in Tokyo. European Journal of Geography, 査読有, 5-2, 2014年, 61-76.

杉本興運・菊地俊夫、日本における観光資源分布の地域的特徴。地学雑誌、査読有、123、2014年、1-24。

菊地俊夫・有馬貴之・黒沼吉弘、小笠原諸島の観光と自然資源の適正利用 - 南島の事例を中心に - 。ペドロジスト、査読有、56、2013年、101-108。

飯塚 遼・菊地俊夫, ベルギー・西フランドレン州ワトウ地区におけるフード・ツーリズムの重層構造モデル 観光科学研究, 査読有, 6、2013年、1-15 .

菊地俊夫, ニュージーランドの地理学 - ローカルな視点からグローバルな視点へ . 地学雑誌, 査読有, 121、2012年、902-912 .

[学会発表]10件

菊地俊夫, 首都圏外縁部における高冷地農業の新戦略としての水平的分業システム - 日本農業の存続・成長戦略に関する地理学的研究 (その2) - . 日本地理学会秋季学術大会, 2015年9月19日、愛媛大学 (愛媛県・松山市).

Iizuka, R., Takatori, Y. and Kikuchi, T., Rural Gentrification and Tourism Development: A Case of Villages in the Fuji-submontane Area, Japan. XXVI European Society For Rural Sociology Congress, 2015年8月26日, Aberdeen, Scotland.

Tabayashi, A., Yagasaki, N., Kikuchi, T., Nihei, T., Kaneko, J. and Waldichuk, T., Commodification of rural spaces in British Columbia, Canada. Japan Studies Association of Canada, 2015年5月22日, Embassy of Canada, Minato City, Tokyo.

Kikuchi, T., Urban agriculture for the baby boomer generation's sustainable second life cropping. Inaugural Meeting of the Global Social Economy Forum, 2014年11月19日, Seoul, Republic of Korea.

Kikuchi, T. and Tabayashi, A., The commodification of rural space with the restructuring of urban farming of Tokyo metropolis: a case study of the Sunagawa area, Tachikawa city. IGU Regional Conference, 2014年8月20日, Krakow, Poland.

Iizuka, R., Kikuchi, T. and Yamamoto, M., Community mixing and rural community changes in the Gower Peninsula. IGU Regional Conference, 2014年8月20日, Krakow, Poland.

Iizuka, R., Miyachi, T., Kikuchi, T. and

Yamamoto, M., Consumer-participatory Utilisation of Urban Farmlands and Commodification of Rurality: A Case Study of Nerima Ward, Tokyo. Royal Geographical Society with Institute of British Geographers Annual International Conference, 2013年8月29日, London, England.

Iizuka, R. and Kikuchi, T., Current Situations and Critical Issues of Primary Food Supply in Metropolitan Areas in Japan: The Case of the Tokyo Market. European Association of Geographers Conference, 2013年5月10日, Brugge, Belgium.

Iizuka, R. and Kikuchi, T., Examination of Multilayer Model of Food Tourism in Watou, West Flanders, Belgium. Association of American Geographers Annual Meeting, 2013年4月13日, Los Angeles, U.S.A.

KIKUCHI, T., Development of Rurality-based on Tourism through the Commodification of Rurality in the Jike Area, Yokohama City, Tokyo Metropolitan Fringe. 32nd International Geographical Congress, 2012年8月24日, Cologne, Germany.

[図書]4件

菊地俊夫・松村公明, 朝倉書店、文化ツーリズム学、2016年、180ページ .

菊地俊夫・有馬貴之, 朝倉書店、自然ツーリズム学、2015年、175ページ .

菊地俊夫・小田宏信, 朝倉書店、世界地誌 東南アジア・オセアニア、2014年、168ページ .

高橋伸夫・菊地俊夫他, 古今書院、都市空間の見方・考え方、2013年、159ページ .

6 . 研究組織

(1)研究代表者

菊地 俊夫 (KIKUCHI, Toshio)

首都大学東京都市環境科学研究科・教授

研究者番号 : 50169827